

サマリアの井戸辺での主イエスと一人の女性との対話の箇所から御言葉を聴いています。今日の所は、その対話の続きです。一言で“伝道”について示されていると言えるでしょうか。4章の「イエスとサマリアの女」と題された箇所は、最後まで読んでいくと、この話がただ単にこのサマリアの女個人の救いに関わるだけではなく、「町の多くのサマリア人は…イエスを信じた」(39)とあるように、サマリア伝道の始まりが示されているのです。そのサマリアの女性の話に挟まれるようにして31～38節では、この女とは対照的な弟子たちの姿が描かれています。女は、主イエスと出会って変えられ、キリストを証しするようになっていきます。一方、弟子たちは「『刈り入れまでまだ四か月ある』と言っている」(35)。刈り入れを待っている状態です。この後、サマリアの人々がイエス・キリストを受け入れていく(39)ことを予感させる言葉です。弟子たちが何もしない間に、その彼らに代わるようにして主(の種蒔き)によって変えられた(刈り入れられた)人が、主のところから町に出ていって福音を宣べ伝える(種蒔きの)仕事をしている姿が対比させて描かれています。自分で蒔いて育てたのではないのに誰かが備えてくれ、それを刈り入れる喜ぶを味わっているのです。ここに私たちがこの箇所から学ぶべきことが示されています。それは、主イエスが種蒔いたものをやがて弟子たち(私たち)が刈り入れる日が来るといこと。そしてそこでまた弟子たち(私たち)が種蒔いたものをその次の世代が刈り取っていく。刈り入れをしながら種蒔きをしていく。一つの業が、刈り入れであると同時に種蒔きになっていくのです。それが“伝道”の不思議なところ。「**こうして、蒔く人も刈る人も共に喜ぶ**」(36)ということが実現するのです。すでに主が種蒔いた畑が色づいているのです。主への信頼をささげてまいりましょう。